

新宮城(丹鶴城, 沖見城) (国史跡, 続百名城) (新宮市新宮字丹鶴)

新宮城(しんぐうじょう)は、和歌山県新宮市にあった城である。別名を丹鶴城(たんかくじょう)、もしくは沖見城(おきみじょう)ともいう。

新宮城は、熊野川沿岸の田鶴原(たづはら)とも呼ばれるあたりの小高い丘である丹鶴山(現在の和歌山県新宮市新宮字丹鶴)に築かれた平山城である。別名、丹鶴城は、もてこの地に、源為義と熊野別当の娘の子である丹鶴(たんかく)姫の住まいがあったとすることからである^[1]。ちなみに、新宮城築城を計画した堀内氏の祖とされる新宮十郎行家(源頼朝の叔父)は丹鶴の弟である。現在の地に築城したのは浅野忠長である。大小の天守や鐘の丸、松の丸のある姿となったのは水野2代重良の頃である^[2]。堀内氏時代の城跡は、全龍寺の境内となり、寺の西側に水堀が残る。浅野・水野氏時代の城跡には石垣が残されている。1954年には新宮城本丸周辺は民有地となっていて当時旅館業を営んでいた業者が通称二の丸(登坂側登り口。本来の二ノ丸は現在の正明保育園の場所に位置する)と本丸を結ぶケーブルカーを運行していたが、1980年(昭和55年)に休止し、1990年代正式廃線となっている。現状は、本丸付近はその後公有地化され丹鶴城公園となっており、民有地時代のケーブルカーの停留所跡等もある。地下には紀勢本線のトンネルが通されている。また東側の一部は天理教南海大教会の敷地の一部になっている。現在、新宮市では天守の再建も視野に入れた整備計画が進行中である。

天正年間に、堀内氏によって築城が計画されたが、関ヶ原の戦い(大坂の役とも)で豊臣方についたため工事は着手されず、代わって、1618年、紀州藩主浅野長晟の重臣・浅野忠吉が、場所を熊野川の沿岸に移して再築。浅野氏が備後三原の三原城(現在の広島県三原市)へ転封し、徳川頼宣が紀州藩主として入国して以後、付家老・水野重仲が城主となり、水野氏の居城として明治維新を迎えた。

明治6年(1873年)に天守などの建物を払い下げ、取り壊す。旧材は寺院に転用された。現在は、本丸跡などが丹鶴城公園として整備され「和歌山県朝日夕陽百選」にも選定されている。

Wikipediaによる

新宮城跡は、昔からお城山と呼ばれ、郷土の文豪・佐藤春夫の小説「わんぱく時代」の舞台となったところでもある。新宮城は元々丹鶴姫が住んでいたということから「丹鶴城」、または、熊野川河口の先に太平洋を眺められることから「沖見城」とも呼ばれる。平安時代(今から1,000年ほど前)当地を治めていた熊野別当が別荘を建てていたこの場所に、新宮十郎行家が始めて城を築いたともいわれる。

正式には、1,601年・浅野忠吉が築城に着手したのが始まりである。同年、浅野忠吉は寺地を城地にするために、東仙寺、崗輪寺(宗応寺)を他所へ移転したとある(紀伊続風土記)。1,615年(元和元年)の一国一城令で廃城を命ぜられるが、場所的に重要な城として、3年後再建を許可された。翌年、忠吉が三原に移封したため築城工事が中断したが、紀州徳川家の付家老・水野重仲が新宮を領することになり、工事が引き継がれた。1,633年(寛永10年)第二代城主・重良の時に一応の完成をみた。小さいながらも、地元の熊野酸性火成岩を用い石塁を積み上げた優美な平山城が竣工した。小粒だが完成度が高く、日本一の名城とも言われたようだ。惜しくも1,871年(明治4年)廃城となり、1,875年(明治8年)には、建造物がすべて取り壊された。大正年間には、堀も埋め立てられ丹鶴町ができた。現在の正明保育園の場所は「二の丸」と呼ばれ、領国支配の政庁の中枢機関があったところで、その向かいのNTT跡は、城主の日常的な屋敷があったところである。登城のための大手道は、二の丸の北側(川寄り)からカギ形に屈曲して松の丸に登るもので、鐘の丸を経て本丸に至るようになっていた。

今は、昔の栄華をしのぶお城の石垣だけが残されている。石垣の石積みは目を見張るほどの美の極致を表現している。国の史跡指定がなされているので国宝級のもの。今で言えば最高級の技術集団の作品である。なぜこのように優れたものが造られたかといえ、徳川家ゆかりの重要な城であったため念入りに造られ

たからである。位置的に紀州と尾張の中間にあったこともそのひとつだといわれている。新宮藩のランクは3万5千石だから下級であるが、実質は数十万石もの力があつたとも言われている。

水の手郭には港があり、軍港とともに経済的物流港の役割も果たし、上質の炭や鯨油を江戸に販売していた。炭は江戸の炭消費量の3割を賄ったといわれる。第九代城主・水野忠央（ただなか）は、他藩が羨む大富豪であつた。

新宮市観光協会サイトによる

